

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

特に注意！(8月)①

バラ科果樹：
クビアカツヤカミキリ

フラス



幼虫

成虫

特徴

- ◆ 成虫は体長2～4cm。前胸部は明赤色で、全体は光沢ある黒色。成虫は6～8月頃に出現。
- ◆ 幼虫は樹木内部を食い荒らし、枯死させる。3月下旬から中華麺～うどん状のフラス(木くず等の混合物)を出す。
- ◆ フラスが出ている穴の周辺に幼虫がいる可能性が高い。
- ◆ 若齢幼虫はうどんよりも細い(中華麺状)フラスを出すことがあり、見つけにくいがこの時期の防除が効果的。

防除のポイント

- ◆ ネット内での交尾・産卵を防ぐため、定期的にネット内を確認し、成虫は見つけしだい捕殺する。
- ◆ 成虫発生期(6～8月)に樹体にモスピラン顆粒水溶剤等を散布し、成虫やふ化直後～初期の幼虫を殺虫する。
- ◆ フラスを見つけたら、千枚通しや針金等を穴に入れ、中のフラスをかき出してからロビンフッド、ベニカカミキリムシエアゾールを注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。



「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策(R5.3改訂版)」についてもご参照ください。
http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/Aromia_bungii/kubiaka2303.pdf

かんしょ(さつまいも)：
基腐病

被害株の葉の変色

特徴

- ◆ かび(糸状菌)の一種が原因。
- ◆ 葉が黄変・萎凋したり、茎の基部が暗褐色～黒色に変色する。
- ◆ 進行すると茎葉の枯死、いもが腐敗する。

防除のポイント

- ◆ 排水不良により発生しやすいので、ほ場の排水対策を徹底する。
- ◆ ほ場を定期的に見回り、発病株の早期発見に努める。
- ◆ 発病株は早めに除去し、ほ場外に持ち出して適切に処分するとともにアミスター20フロアブル、トリフミン水和剤などを散布する。



▲詳しくはこちら

6月～8月は農薬危害防止運動月間です。農薬は適正に使用し、事故・被害を防止しましょう！

令和5年度版に
更新しました！

次回の情報は8月下旬にお知らせします。

◎「防除指針」 <http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>

※農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

特に注意！(8月)②

花き(きく):
黒斑病、褐斑病

病斑*

特徴

- ◆ 雨滴によって感染が拡大する。
- ◆ 病原菌の生育適温は24～28℃ぐらいである。

防除のポイント

- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ◆ ダコニール1000などを散布し、予防に努める。発生を認めたら、トップジンM水和剤(登録は褐斑病のみ)、ベンレート水和剤などを散布する。

注)ダコニール1000は、花卉に薬液が付着すると漂白・退色などによる斑点を生じる場合があるので着色期以降の散布はさける。また、かぶれに注意する。

野菜・花き類:
シオイチモジヨトウ

幼虫

特徴

- ◆ ねぎでの発生が多いが、しゅんぎく、まめ類、なす科野菜、あぶらな科野菜、花き類など多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、グレーシア乳剤(ねぎなど)、ベネビアOD(ねぎなど)、ロムダンフロアブル(ねぎ、花き類・観葉植物、きく)などを散布する。

野菜・花き類:
アザミウマ類ミナミキイロアザミウマ成虫
※ミカンキイロアザミウマ
成虫※

特徴

- ◆ なすでは、ミナミキイロアザミウマ(葉・果実)やミカンキイロアザミウマ(葉・主に水なすの果実)による被害が大きい。
- ◆ 苗からの持ち込みによる発生がみられることがある。
- ◆ きくでは、ミカンキイロアザミウマはウイルス(TSWV:キクえそ病の病原ウイルス、CSNV:キク茎えそ病の病原ウイルス)を媒介する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見られたら、アフーム乳剤(なす、きくなど)、ファインセーブフロアブル(なす、きくなど)、モベントフロアブル(なすなど)、ダブルシューターSE(なす、花き類・観葉植物など)、グレーシア乳剤(なす、きくなど)、スピノエース顆粒水和剤(なす、きくなど)などを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 雑草は増殖場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。
- ◆ 残さは放置せず、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 施設開口部に目合い0.8mmの赤色ネット又は0.4mmの白色ネットを展張する。

※農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

※原図：(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所

*原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑(大阪府植物防疫協会)

病害虫の発生予報(8月)

水稲

品目	程度				
	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
水稲			いもち病		
			縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)		
			紋枯病		
			斑点米カメムシ類		
			トビイロウンカ		
	発生に注意:ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)				

果樹類

品目	程度				
	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
ぶどう		べと病			
			褐斑病		
			晩腐病		
			黒とう病		
			チャノキイロアザミウマ		
			フタテンヒメヨコバイ		
				ハダニ類	
もも			せん孔細菌病		
			シンクイムシ類		
バラ科果樹	発生に注意: クビアカツヤカミキリ				
みかん			黒点病		
		ミカンハダニ			
			ミカンサビダニ		
果樹類全般		果樹カメムシ類			

病害虫の発生予報(8月)

野菜類

品目	程度	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
なす			うどんこ病		アザミウマ類	
ねぎ	発生に注意:葉枯病、ネギハモグリバエ、ネギアザミウマ(えそ条斑病)					
さつまいも (かんしょ)	発生に注意:基腐病					

※ねぎは令和5年6月より巡回調査を開始したため、平年値がありません。

花き(きく)

品目	程度	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
きく					黒斑病・褐斑病	
				アザミウマ類		

野菜類・花き類

品目	程度	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
野菜類・ 花き類				シロイチモジヨトウ		
				ハスモンヨトウ		
				コナガ		
				オオタバコガ		
				アブラムシ類		
				コナジラミ類		

水稻

いもち病



葉いもちの病斑

特徴

- ◆ 低温多湿で日照不足の時に発生しやすく、降雨、窒素過多、過繁茂などで助長される。
- ◆ 止葉に病斑ができると、水滴に乗って出穂してくる穂に感染し、穂いもちの原因になるので、止葉に病斑が見られたら必ず防除する。

防除のポイント

- ◆ 常発ほ場で箱施用剤を使用できなかった場合は、発生前にオリゼメート粒剤、コラトップ粒剤5、ゴウケツ粒剤、サンブラス粒剤などを散布する。
- ◆ 発生を認めたらブラシフロアブルなどを散布する。

縞葉枯病(ヒメトビウンカ)



縞葉枯病発病株



ヒメトビウンカ成虫

特徴

- ◆ 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介される。
- ◆ り病株では、新葉が垂れ下がって枯死する(ゆうれい症状)。

防除のポイント

- ◆ ヒメトビウンカが飛来しないように、周辺のイネ科雑草を除草する。
- ◆ り病株は治療できないので、発生が多い場合は、翌年のためにアプロード水和剤、スタークル粒剤・アルバリン粒剤、エクシードフロアブルなどを散布する。

紋枯病



紋枯病発病株

特徴

- ◆ 水際の葉鞘部分に楕円形の病斑ができる。
- ◆ 病原菌は糸状菌の一種で高温(28~32℃)、多湿時に多発する。

防除のポイント

- ◆ 窒素肥料の過用、遅い追肥は避ける。
- ◆ 発生を認めたら、バリダシン液剤5、モンガリット粒剤などを散布する。

注意！

水稻でのモンガリット粒剤の使用時期は「収穫45日前まで」

水稻

斑点米カメムシ類



アカスジカスミカメ

アカヒゲホソミドリカスミカメ
(イネホソミドリカスミカメ)

ホソハリカメムシ

特徴

- ◆ アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ(別名イネホソミドリカスミカメ)、ホソハリカメムシなどの発生が多い。
- ◆ 畦畔のイネ科雑草などから飛来する。
- ◆ 薬剤散布は穂揃期とその7~10日後に行う。

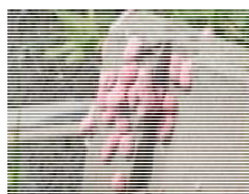
防除のポイント

- ◆ 出穂10日前までにほ場周辺の畦畔や休耕田の除草を実施する。

ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)



成貝



卵塊

特徴

- ◆ 成貝の殻高は2~7cm程度。

注)成貝の写真は、農林水産省リーフレット「ジャンボタニシによる水稻の被害を防ぐために」より引用。

カラー技術資料

「ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)から稲を守りましょう！」はこちら
<http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/tanishi/tanishi2017.pdf>

防除のポイント

- ◆ ピンク色の卵塊を発見した場合は、水中に掻き落とす。白っぽくなった卵塊は水中に落とすと逆に孵化するので地上で処分する。
- ◆ 成貝を見つけたら捕殺する。
- ◆ 用水路からの侵入を防ぐため、取水口や排水口に金網(編目5mm以下)を設置する。

トビイロウンカ



成虫



坪枯れ症状

特徴

- ◆ 6月下旬~7月上旬の梅雨時期に中国大陸から長翅型成虫(飛来世代)が日本に飛来する。
- ◆ 水田に着地したトビイロウンカは分げつ期のイネの株元に住み着き、茎の表面に産卵する。

- ◆ 卵は1週間ほどで孵化し、幼虫(第1世代)は親と同じくイネの株元で、その師管液を吸汁して成長する。その後、数回の脱皮を経て成虫となる。第2世代、第3世代が繁殖し、出穂期以降に多発すると坪枯れ症状が生じる。

防除のポイント

- ◆ トビイロウンカは稲の株元(水際)に生息するので、稲の株元を叩くなどして発生しているかを確認する。
- ◆ 発生が見られたら、エクシードフロアブル、エミリアフロアブル、スタークル粒剤・アルバリン粒剤などを散布する。



幼虫

詳細は、病害虫カラー技術資料「水稻 トビイロウンカの防除 改訂版 R4.3」をご参照ください。
http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/tobihiro/R4tobihiro_manual.pdf

果樹

ぶどう

べと病



葉裏の症状



葉表の症状

特徴

- ◆ 雨が続くとまん延しやすい。

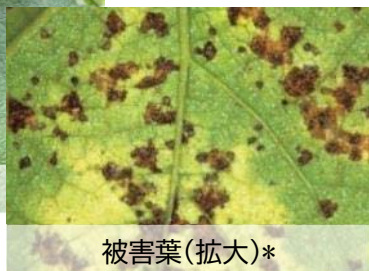
防除のポイント

- ◆ 発生を認めたらオロンディスウルトラSC、ライメイフロアブルなどを散布する。
- ◆ 農薬を散布する際に、薬害や果実の汚れを避けるため、笠・袋かけ後は棚上散布を行う。

褐斑病



被害葉



被害葉(拡大)*

特徴

- ◆ 米国系品種に弱い品種が多く、デラウエア、バッファローなどに発生が多い。
- ◆ 多発すると、葉が早期落葉し、果実の着色が不良となる。

防除のポイント

- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、オンリーワンフロアブル、ネクスターフロアブル、フルーツセイバーなどを散布する。

晩腐病



被害果※

特徴

- ◆ 新梢伸長期～収穫期に雨が多いと多発しやすい。
- ◆ デラウエアに発生が多く、病原菌は結果母枝、巻きつるなどで越冬する。

防除のポイント

- ◆ 施設内への雨滴の侵入を防ぐ。
- ◆ 笠かけや袋かけを行う。
- ◆ 被害果房は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 前年度の発生状況をふまえ、フルーツセイバー、オンリーワンフロアブルなどを予防的に散布する。

黒とう病



被害果



被害果(拡大)

特徴

- ◆ 葉、果実、新梢、巻きヒゲに発病し、大粒系に発生が多い。
- ◆ 枝や果実に黒色の病斑が生じ、果実肥大の不良など品質低下につながる。

防除のポイント

- ◆ 雨よけすることで被害が軽減できる。
- ◆ 被害果房や枝は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 園芸ボルドーなどを予防的に散布する。

※原図：(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所

*原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑(大阪府植物防疫協会)

- 病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。(http://www.jppn.ne.jp/osaka/)
- 農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

果樹

ぶどう

チャノキイロアザミウマ



被害果*

特徴

- ◆ 巨峰、シャインマスカット等の大粒系品種で被害が大きくなりやすい。

防除のポイント

- ◆ ディアナWDG、エクシレルSE、スタークル顆粒水溶剤・アルバリン顆粒水和剤などを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

フタテンヒメヨコバイ



被害葉 *

特徴

- ◆ 葉の裏側から吸汁する。被害部分は色が白く抜ける。

防除のポイント

- ◆ 園周辺の草むらや落葉下で多く越冬するので、周囲の除草や清掃に努める。
- ◆ 発生に注意し、被害の初期に防除する。
- ◆ スタークル顆粒水和剤・アルバリン顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤などを散布する。

ハダニ類



カンザワハダニ※

特徴

- ◆ 加温機の近くやダクトの先端部等、高温になりやすいところから発生することが多い。

防除のポイント

- ◆ 発生を確認した場合は、マイトコーネフロアブル、ダニコングフロアブル、ダニトロンフロアブル等を散布する。

もも

せん孔細菌病



被害果



葉の病斑

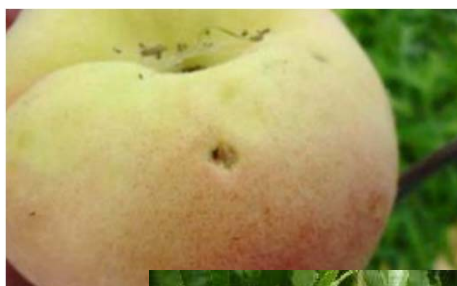
特徴

- ◆ 葉に黄色から赤褐色の病斑が生じ、やがて穴が開く(せん孔)。
- ◆ 果実でも針で突いたような褐色斑点を生じ、果実生育により大小様々の病斑となる。
- ◆ 病原細菌は、雨水に混じって分散し、気孔や傷口から感染する。

防除のポイント

- ◆ 風当たりの強い園地では、防風ネットを設置するなどの対策を行う。
- ◆ せん孔細菌病が多発している園では、収穫前日数に注意して**バリダシン液剤5**、**スターナ水和剤**、**チオノックフロアブル**などを散布する。

シンクイムシ類



被害果



被害枝

特徴

- ◆ ももの果実に食入するシンクイムシ類は、ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ、モモノゴマダラノメイガがある。

防除のポイント

- ◆ 発生初期に**モスピラン顆粒水溶剤**、**ディアナWDG**などを散布する。
- ◆ 被害果や被害枝は、ほ場外に持ち出し処分する。

温州みかん

黒点病



被害果

特徴

- ◆ 雨が続くと発生が増加する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期にジマンダイセン水和剤・ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤などを散布する。降雨が多い場合には、散布回数を増やす。

※注意！

かんきつ(みかんを除く)では、上記3剤とも使用時期が「収穫90日前まで」なので使用時期に注意する。また、皮膚のかぶれに注意する。

ミカンハダニ



被害葉

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなる。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、ダニコングフロアブル、スターマイトプラスフロアブルなどを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 薬剤は、葉裏にもかかるように十分量を散布する。

ミカンサビダニ



被害果*

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなりやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、コテツフロアブル、コロマイト水和剤、スターマイトプラスフロアブルなどを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

果樹類全般

※作物毎に登録内容が異なるので、散布前に必ずラベル等で確認する！

果樹カメムシ類



チャバネアオカメムシ※

特徴

- ◆ チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシなどが加害する。

防除のポイント

- ◆ 園全体を目合い4mmのネットで覆い、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、アディオン乳剤(かんきつ、もも、かきなど)、スタークル顆粒水溶剤・アルバリン顆粒水溶剤(かんきつ、もも、かき、ぶどう、なしなど)等を散布する。

野菜

なす

うどんこ病



葉の病斑

特徴

- ◆ 窒素過多で気温が25～28℃、湿度が50～80%で日照不足が続くと発生しやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、パンチョTF顆粒水和剤、スコア顆粒水和剤、プロパティフロアブルなどを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

ねぎ

葉枯病



葉の病斑

特徴

- ◆ 糸状菌(カビ)の一種が原因で発生する病害。
- ◆ 黒斑病と症状が似ており、区別が難しい。
- ◆ 病斑は紡錘形～楕円形で褐色。また、黒色のかびが発生する。

防除のポイント

- ◆ 被害株はほ場外へ持ち出し適切に処分する。
- ◆ 発生を認めたら、アミスター20フロアブル、パレード20フロアブルなどを散布する。

ネギハモグリバエ



葉の食害痕

特徴

- ◆ 葉の内部を幼虫が食い進み、その痕が細長く白い筋になる。
- ◆ 新系統が発見されており、従来に比べて一葉あたりの幼虫数が多く、集中的に葉肉を食害するため、葉が白化したようになる。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、系統に関わらず、「ハモグリバエ類」、「ネギハモグリバエ」に適用のあるグレースシア乳剤、アフアーム乳剤などにより、発生初期の防除を徹底する。



▲新系統について詳しくはこちら

ネギアザミウマ(えそ条斑病)



葉の病斑

特徴

- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するウイルス病。
- ◆ はじめ葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が癒合拡大し、葉が萎凋・枯死することがある。

防除のポイント

- ◆ えそ条斑病に対する有効な薬剤はないので、媒介昆虫であるネギアザミウマの防除を徹底するとともに、感染株を見つけたらほ場外に持ち出し適切に処分する。
- ◆ えそ条斑病の病原ウイルス(IYSV)は一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、グレースシア乳剤、プレオフロアブル、スミチオン乳剤等を散布する。なお、薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。



ネギアザミウマ

野菜類・花き類

※作物毎に登録内容が異なるので、散布前に必ずラベル等で確認する！

ハスモンヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ なす科野菜、さといもなど多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、アディオン乳剤(さといも、さといも(葉柄)、オクラ、豆类(未成熟)など)、ディアナSC(かぼちゃ、なす、トマト、ミニトマトなど)、コテツフロアブル(さといも(葉柄)、さといも、オクラ、花き類・観葉植物など)、プレバソンフロアブル5(さといも、なす、ピーマンなど)等を散布する。

ヨトウムシ類については「ヨトウムシ類の見分け方」をご参照ください。

<http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/yoto/yoto.pdf>

コナガ



幼虫 ※



成虫 ※

特徴

- ◆ 主にあぶらな科野菜を加害し、葉を薄皮だけ残して食害する。
- ◆ 一部地域でジアミド系殺虫剤に対する抵抗性が生じている。

防除のポイント

- ◆ 同じ系統の薬剤を連用しないよう注意する。
- ◆ 発生を認めたら、アクセルフロアブル(非結球あぶらな科葉菜類など)、ディアナSC(非結球あぶらな科葉菜類など)等を散布する。

アブラムシ類



ワタアブラムシ※

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、モスピラン顆粒水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、未成熟とうもろこし、しゅんぎくなど)、アドマイヤー顆粒水和剤(なす、トマト、ミニトマトなど)、コルト顆粒水和剤(なす、トマト、ミニトマト、花き類・観葉植物など)、ウララDE(なす、トマト、ミニトマト、ピーマンなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

※原図：(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所

※原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑(大阪府植物防疫協会)

コナジラミ類



タバココナジラミ ※

特徴

- ◆ オンシツコナジラミ、タバココナジラミが発生し、すす病を引き起こす。
- ◆ トマトではタバココナジラミは吸汁による果実の着色不良、トマト黄化葉巻ウイルス (TYLCV)の伝搬等、様々な被害を引き起こす。

防除のポイント

- ◆ トマト黄化葉巻病などのウイルス病は、感染すると株ごと除去する以外に対策がないため、媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ 施設開口部に目合い0.4mmのネットを展張する。
- ◆ ほ場内及び周辺の除草を徹底する。
- ◆ グレースシア乳剤(なす、トマト、ミニトマト、きゅうりなど)、ベネビアOD(トマト、ミニトマト、きゅうりなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

オオタバコガ



幼虫

特徴

- ◆ 果実や茎などに食入する。食害痕のまわりに虫糞が確認されることが多い。

防除のポイント

- ◆ 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が落ちるため、捕殺等も含めて早めに対応を行う。
- ◆ 発生を認めたら、プレバソフフロアブル5(なす、トマト、ミニトマトなど)、スピノエース顆粒水和剤(なす、トマト、ミニトマト、きくなど)、プレオフロアブル(なす、トマト、ミニトマト、未成熟ともろこし、花き類・観葉植物など)等を散布する。



卵